

XX

Facebook, 2023.9.1

映画「マゴーネ」

映画「マゴーネ」を観ました。

感動しました。

ヴァネチアのガラス作家・土田康彦の創作に当たっての、生きていく上での、哲学を、8年間にわたって記録した田邊アツシ監督の作品。（監督・脚本・撮影・編集・ナレーション：田邊アツシ。田邊アツシの映画・文学・美術の境界を超えて「私」を見つけるひとつの試み）

副題は、『土田康彦「運命の交差点」についての研究』

広告チラシからの引用：

『タイトルの「マゴーネ (Magone)」は北イタリアの方言で「夕日を見る時の胸を締めつけられるような感覚」を意味するが、土田は日本の諺にある“袖振り合うも多生の縁”とも繋がる感覚だと語る。偶然が運ぶ縁を創作に生かす土田の人生観も共感を誘う。』

田邊監督の言葉：

『私は主に「ノンフィクション映画（ドキュメンタリーよりも監督のフィルターや考察、作家性を強く前面に出した映画）」と定義づけた作品制作を通して・・・

映画『マゴーネ』では、私の、土田氏との出会いによって得られた自らの人間としての成長体験を、作品を通して鑑賞してくださる皆さんと共有したいとの思いを込めています。』

副題やチラシの解説文が説く通りです。

また田邊監督の言葉にある通り、田邊氏が土田康彦の著作との出会いから映画制作に至ったという動機、それを実現した企画、構成、制作思想にも感心しました。

<http://magone->

[film.com/index.html?fbclid=IwAR1Bk8IBN7my2l0SSSEnCs1eswfyOJU7rCQXMIusHYsMNCvkJmLzoybIELc](http://magone-film.com/index.html?fbclid=IwAR1Bk8IBN7my2l0SSSEnCs1eswfyOJU7rCQXMIusHYsMNCvkJmLzoybIELc)

XX

田邊アツシ氏のコメント

原野様、この度は映画『マゴーネ』をご観賞・ご投稿いただき誠に有り難うございます。

私どもの想いに寄り添うように本作を感じ取って下さった事、とても光栄で嬉しいです。

先日のご投稿も併せて拝読させて頂き、表現者としてとても励みになりました。

取り急ぎお礼まで。

田邊アツシ

oo

原野のレスポンス

監督様直々にお言葉をいただき恐縮しています。

Facebook 投稿、言葉で十分表現することができていません。

映画の中でもしばしば「ことば」で表すことができないものを、というようなことが言われていたと思います。

実は magone という言葉、いまだに腑に落ちたとは言えない状態です。

早速、土田康彦『辻調鮨科』を注文したところです。

oo

田邊アツシ氏のレスポンス

ご返信ありがとうございます。個人的には Magone という感覚は「もののあはれ」に繋がって行くように考えております。

『辻調鮨科』のご感想も是非伺いたいです。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

oo

原野のレスポンス

友人2人と観ましたが、2人とも土田氏の出逢いを大事にする生き方（9万人の観客の中の1人が、どのような運命のいたずらか、前から3番目の自分の隣の席に座った、そこから3人の建築家と繋がり、ガラスの橋という作品が生まれた、など。）、および田邊監督が土田氏と出逢ったことから、あのような素晴らしい映画を制作されたことに、深く深く感銘しています。

2人とも女性で、絵を描く人です。

原野と意気投合している人です。

2人の友人も、原野と田邊監督とが、Facebook を介して、響き合っているのをみて、我が事のように喜んでくれています。

2人は千住博の熱烈なファンです。

私も2人に連れられ、高野山に行き、千住博制作の襖絵を拝観しました。拝観して、画家・千住博に対する目が開かれました。

oo

土田康彦『辻調鮨科』、読みました。

どこまでも「本物」を求める主人公・長谷川と、著者・土田康彦の生き方が重なってみえてきます。

これを読んだ田邊アツシ氏が、土田康彦本人と出逢い、土田の「本物」の芸術家としての創作のあり方、生き方、人生哲学を映画にしたいと取り組んだ田邊監督の映画「マゴーネ」理解が一段と進みました。

(最後は、長谷川は借用中の1万円を加えた金額を報告すれば良かったと思います。)

印象に残った1節

- ・本物を知ってこそ本物となれる。(p. 378)
- ・料理人ほど芸術に向き合い続けている人間はいない。

鮪こそ芸術なんだから。(p. 270)

- ・金継ぎ、人間も同じ

どん底に落ちたやつでも・・・

一回ぶっ壊れたやつでも、魂を込めて学び、手に職を付ければ・・・

俺はそう信じて鮪を握ってる。(p. 332)

oo

田邊アツシ氏のレスポンス

ありがとうございます。もうお読みになられたのですね!!

私も金継ぎのくだけは好きです。

XX

XX

Facebook, 2023.8.14

映画「マゴーネ」に寄せて

10年近く前、南イタリアへの団体旅行に参加しました。

その時滞在したカステッラマーレのホテルの窓から、見渡す限りの海の向こうに、真っ赤な大きな太陽が沈んでいくのを見て、胸が締め付けられるような感動をおぼえました。目の下では地元の人が、はるか前からいつまでもいつまでも沈みゆく太陽を眺めていました。地元の人、来る日も来る日も、あのように太陽が海に沈んでいく様子を眺めて一日を終えるのだなあと思いながら。そのような人々と、山に囲まれた村で一日を終える人々と、夕陽に対して抱く気持ちにも大きな差があるだろうなあ、と思いながら。

今日、「マゴーネ」という映画のチラシを見ました。ヴェネチアのムラノ島で活躍するガラス作家兼料理人の土田康彦を追った作品のようです。

題名の「マゴーネ」はどういう意味だろうと解説を読むと、「夕日を見る時の胸を締めつけられるような感覚」とあるではありませんか。まさに私が体験したあの感覚だと直感しました。

イタリア語（イタリア人）固有の表現のようですが、体験した者には理解できる気がします。

辞書ではそこまでの説明は出ていませんでした。（『伊和中辞典』小学館）

<https://magone-film.com>

XX

S氏のコメント、2023.8.14

知らない単語なので、いろいろ辞書を引いてみた。

どうも辞書の定義では、否定的な意味しか載っていない。

Zingarelli を引いても同様である。同じ版元 Zingarelli の il Bloch という伊仏伊辞典でも同じ。cafard という仏語を挙げている。

伊和辞典でも

<https://kotobank.jp/itjaward/magone>

わたしも留学の終り頃リュック一つで貧乏旅行をしたとき、ソレントで日没を見て感動した。

oo

原野のレスポンス

私もソレントへ行く前に泊まった町での夕陽でした。

いずれも南イタリアですね。

映画の解説では、「magone は北イタリアの方言」とあります。

それにしても、見渡す限り海しか見えない所に真っ赤な太陽が沈んでいく様を見たことがない私などが「胸を締めつけられるような感動」をおぼえたのは分かりますが、毎日見ているイタリア人も、沈みゆく太陽を見て、「胸を締めつけられるような感覚」を抱くのですね。

magone の含む本当の意味は理解できていません。

朝から今まで、この地上に燦々と光や熱を降り注いできて、今日1日の働きを終え、しばしの休息へと向かおうとしている太陽に、「お疲れ様でした、ご苦労様でした」

という気持ちでしょうか。

ガラス作家・土田康彦は「袖触れ合うも多生の縁」とも繋がる感覚だ、と語っている
そうです。

XX

W氏のコメント、2023.8.15

とても良いお話、ありがとうございます。
胸が締め付けられる感動を覚えるのは、受け手の「感性」が豊かであることも大きな
要因かと思われました。私もぜひ経験してみたいものですが・・・

oo

原野のレスポンス

夕陽は山に沈む、と思っていた私、
ところが左から右まで、見えるのは広い広い海のみ、
その海に太陽が直接沈んでいく、
一刻一刻と、海との距離を縮めながら、
水面に触れながら、徐々に徐々に、
身を沈めていく・・・
その様子が、山陰などで見るのとはまた違って見えました、
太陽の色が、大きさが、にぎやかさが、・・・
眺めている周りの人がみなイタリア人、
それは旅先の異国の地での体験だったので、
単に興奮していただけかも知れません。

XX

H氏のコメント、2023.8.16

今、六本木・国立新美術館にて「テート美術館展」からターナー『湖に沈む夕日』を
観賞し、出てきたところです。
原野先生の言語が絵画化されるとこうなのかと思えました。

oo

原野のレスポンス

ターナーの夕日、南イタリアの夕日、山陰海岸の夕日、それぞれの地域の風土の中
で、それぞれの夕日があるのでしょうかね。

XX

K氏のコメントほか

K氏は原野の最初の Facebook 投稿をシェアしてくださいました。

oo

原野のレスポンス

シェアありがとうございます。

magone というイタリア語のニュアンス、イタリア人がどのような心情を表そうとしているのか、も一つ掘めていません。

それにしても、見渡す限り海しか見えない所に真っ赤な太陽が沈んでいく様を見たことがない私などが「胸を締めつけられるような感動」をおぼえたのは分かりますが、毎日見ているイタリア人も、沈みゆく太陽を見て、「胸を締めつけられるような感覚」を抱くのですね。

magone の含む本当の意味は理解できていません。

朝から今この時まで、この地上に燦々と光や熱を降り注いできて、今日1日の働きを終え、しばしの休息へと向かおうとしている太陽に、「お疲れ様でした、ご苦労様でした」という気持ちでしょうか。

夕陽は山に沈む、と思っていた私、
ところが左から右まで、見えるのは広い広い海のみ、
その海に太陽が直接沈んでいく、
一刻一刻と、海との距離を縮めながら、
水面に触れながら、徐々に徐々に、
身を沈めていく・・・
その様子が、山陰などで見るのとはまた違って見えました、
太陽の色が、大きさが、・・・
眺めている周りの人がみなイタリア人、
それは旅先の異国の地での体験だったので、
単に興奮していただけかも知れません。

要するに、

magone は、夕陽が沈むのを見ている人が、夕陽を見て抱く気持ち、なのか

oo

K氏のレスポンス

マゴーネ。感動の体験ですね。ぼくも小学校の頃、新潟の海岸で海に沈む入日を見ました。以来、日本海に旅する時海に没する太陽を見るため、夕方の海岸を歩きます。

ところで古代ギリシャもそうですが、イタリアでも日没で1日が終わり、その後新しい1日が始まることを、ご存知？ 柳田国男や南方熊楠によれば日本でもそうだった。そうだとすれば、原野先生の手書かれた感動の1節は、さらに輝きをもって伝わってきますね。有難うございました。

oo

原野のレスポンス

日没から新しい1日が始まる、
知りませんでした。
ありがとうございました。

XX

(原野の追記)

夕陽と言えば、ある夏グラスゴーでの体験も強烈であった。
夕方、午後8時頃になっても太陽が地平線近くに留まり、なかなか沈まない。
そのころ自分の影が、日本で見たことがないほど長—く長—く伸びている。
あれほど低い位置の太陽も、長—い長—い自分の影も見ることがなかった。
緯度が高いその地では（グラスゴーは北緯55度、稚内は45度）、夏の日没近くの日常であった。